

## 「フルサトとビル」

この絵は、皇居・東御苑に設営された大嘗宮を描いたもので、令和元年(2019年)12月8日に訪れた際の風景です。背景の近代的なビル群と、手前に広がる古代の様式を受け継いだ簡素な木造建築との、普段は見ることのない鮮やかな対比でした。

皆さんもご存じの通り、天皇が代替わりする際には、国内外に即位を宣言する「即位の礼」と、国家の安寧や五穀豊穡を祈る「大嘗祭」が行われます。大嘗祭が五穀豊穡を祈る行事であることからわかるように、その起源は稲作文化に深く根ざしています。祭りの始まりは、7世紀末(飛鳥時代後期)とされています。天皇の即位時にのみ執り行われる大嘗祭は特別に神聖な場が必要と考え、毎年行われる新嘗祭とは異なる仮設の建物を新たに建てて儀式を行うようになったのでしょうか。そして、これらの仮設建物は祭りが終わるとすぐに撤去されます。この絵に描かれた建物群も古式にならない、一般公開の終了後、速やかに解体されました。

古代の大嘗宮について、少し紹介します。建設はわずか5～7日ほど、まさに短期間の急造でした。使用する材料はどれも素朴で、例えば柱は皮付き丸太が用いられ、建て方は縄文時代の竪穴式住居のように地面へ直接埋め込む掘立柱の黒木造でした。屋根は茅葺で、棟の両端にX字形の千木、その間に棟と直交する鰹木が置かれました。内部は、地面に直接敷物が敷かれ、壁や天井には竹や藁で編んだ蓆(むしろ)が張られたといわれています。

伝統を受け継ぎながら、現代の建材や工法・技術も取り入れて再現された大嘗宮が、いま目の前にあるという事実は、歴史的に見ればある種の奇跡と言えるのかもかもしれません。茅葺きの屋根が板葺きになるなどの変化はあるものの、ビルが立ち並ぶ時代に生きる私達に、遠い昔の「フルサト」を思い起こさせてくれる……そんな思いを抱きながら、この絵を制作しました。



菊岡 保人

Size : 530×455mm (F10)

